



Title	特集 Shakespeare's Sonnetsのレトリック再考
Author(s)	渡辺, 秀樹
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 1-1
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85057
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集 Shakespeare's *Sonnets* のレトリック再考

2019 年度と 2020 年度の認知レトリック論では、それぞれ後期に「英詩のレトリック」をテーマとしてソネット形式の英詩を精読した。注目したのは音韻の効果、同一語句の繰り返し、類義語による言い換え、統語構造の理解、そして各篇の基底をなす概念メタファーである。この 2 年間の成果として当演習に参加した教員と博士課程院生による短論を並べ、「特集 Shakespeare's *Sonnets* のレトリック再考」として発表する。渡辺秀樹はソネットに見える繰り返しのレトリック効果について、音韻、語、統語構造の各レベルから再考した。大森文子はソネットの 4 部構成の最後の 2 行連句が果たす機能について再考し、各編で用いられたメタファーに着目して逆転のレトリック効果を解説している。この 2 論では別の観点から第 12 篇、19 篇、30 篇、60 篇をとともに論じている。寺浦麻由と岡部未希は、演習でそれぞれが担当した第 50 番と第 147 番を再度精読し、確認したレトリックの諸相を非常に細かく、また総合的に描き出している。

演習では、音韻については頭韻・脚韻のみならず母音韻(assonance)や子音韻(consonance)も考慮に入れるように、先に九鬼周造の「押韻論」で試みられたソネット形式の日本語 14 行詩での押韻パターンや、Wilfred Owen の詩に特徴的な *slant rhyme* を参考にした。類義語による言い換えは重要概念や中心テーマに対して行われるのであり、同一表現の繰り返しによるその語句自体の強調と対比・比較すべきこと、単なる同音の繰り返しではなく、頭韻・脚韻構成音がその詩のテーマとなる(概念を表す)語の構成音となっている現象(hypogram)が時に見られることを理解した。語の繰り返しでは、名詞 *love* が「愛の神」「愛情」「愛する人」のように、また名詞 *time* が「(擬人化された)時」「時間」「時代」のように別義で繰り返される場合に注目し、繰り返されときの形容語のヴァリエーションを重視した。

統語構造の理解については、脚韻合わせによる語順の倒置などよりも、実は難解である接続詞によって繋がれた文と文の関係の考察に力を入れた。古英語の “*þa...*, *þa...*” や “*þær...*, *þær...*” などの起源をもつ相関構造(correlative constructions) “*when...*, *then...*” “*where...*, *there...*” や *and yet* や *but* による転換、接続詞が省略されている並列構造(*asyndeton*)の理解、1609 年版の句読点(*punctuation*)と編纂者の用いた現代式句読点に対する批判など、英語史に関する講義も行った。

概念メタファーについては<人生は旅><人生は四季><一生は一日><人は植物><生命は炎><この世は舞台><世界は人体>(<偽りだらけの世界は病い>) <愛は病い><愛は貪食者><愛は旅>などに基づく篇を受講生が担当し、音韻と配語レトリックに加えて概念メタファーを構成する語彙場を論じた。発表では翻訳によるメタファー表現の消失、増訳による原典にない要素の出現現象をテーマとする参加者もいて、日本語訳諸版は格好の参考文献となった。

2008 年度以降数年毎に半期のゼミで読んで来た *The Sonnets* を、2016 年 Shakespeare 没後 400 周年からは毎年後期に戯曲とも合わせ読んで来た。自分が院生の当時に雑誌に出た記事 “*Shall I Die or Shall I Fly*” (*Time* 1985) を参考記事にすると、担当受講生が、今や電子版でアクセスできる当該写本のコピーを配布して説明するなど、フィロロジー専門ではないゼミでも、かなり学術的な議論を行なうことができた。記事で紹介されている「へぼ詩」、これを読むと、やはり若書きへぼ詩か別人作のように思えたが、確かに *Romeo & Juliet* の語句が散見された。

このような演習を続けているうちに、自然、校訂版や注釈が手元に増えたが、それらの中で認知レトリック論の授業テーマに役立ち、最も刺激を受けたのは Helen Vendler, *The Art of Shakespeare's Sonnets* (1997) である。Vendler は、ソネットの第 1・2・3 四行連句と最終 2 行の 4 部構成の各部に同一語が現れる現象に着目し、主題を提示する Key Word として重視する独特の解釈法を提示した。人物関係を探る伝記批評、ソネット形式のレトリックの系譜批評、戯曲の台詞との呼応の指摘、最近ではコーパス言語学の手法で使用語句の分布と統計数値を示す研究も増えている。これらを尻目に本文精読・再読によって、音韻的・語彙的な各編の構造を詳細に、時に図式で示した本書は、1609 年版の影印を添えて 17 世紀初頭と現代の *punctuation* の相違にも自然と気づかせる。日本人が本文校訂までした注釈書には大場建治編『ソネット詩集』(研究社 2018)があり、これは演習参加者 9 名中 5 名がいつも持参していた人気の参考書であったが、大場は Vendler を無視しており、文献一覧にも載せていない。その理由はわからない。

編集者しるす